



HIROSHI FUJINO  
経済学部助教授。

好きなもの(ベストテン)

- タモリ
- 白ビール
- カフェ
- 手紙を書くこと
- レナード・コーエン
- ウィリアム・フォーサイス
- 上方のお笑い(の大部分)
- 『風の歌を聴け』
- 学食
- ヨーロッパ

## 書くことの不思議、あるいは、 書きながら読むことのすすめ

藤野 寛



大学の教師は、馬鹿の一つ覚えのように「本を読め」と言うものだ。私も言う。もつとも、「本を読む」とはいつても、読む本の種類が高校時代までとは随分違ってくる。これまでは、本といえども文学、それも主に小説というのが相場だっただろうが、大学に入ってからはいわゆる専門書や学術論文の類を読むことが要求される。楽しみとしての読書から、勉強としての読書へ。

小説を読むのと学術書を読むのでは、その読み方が全く違う。小説には「筋」があるから、それにはまってしまふとどんだん先が読みたくなる。面白い本であればあるほど速く読める。残りページが少なくなつてゆくのが淋しく感じられる、というような幸福なケースもある。そして、もちろん、普通は最後まで読む。

それに対して、学術書というのは、自分自身があるのを考えてゆくための同伴者のようなものだ。学術書の醍醐味は、その本に刺激されてついつい自分もあれこれ考えてしまふ、という点にある。あれこれ考えるものだから、面白い本ほど、なかなか先に読みすすめられなくなる。逆に言えば、スラスラ読めてしまふ本というのは、読む当人がそれほど必要とされていない本だ、と言ふべきなのかもしれない。読むのを中断してあれこれ考える上でのきっかけを、少しも与えてくれないのだから。もうわかつていふことしか書いてなかったりして。

そういうわけで、面白い本を読むと色んなことが頭に浮かぶ。その時に、是非おすすしたいものが、何かが思い浮かんだらすぐにノートに書き留

めるといふ習慣を身につけることだ。単に、思い浮かんだことを忘れないためだけではない。書くことというのは、それ自体、思考を前にすすめてゆく、それも思いもよらない新しい方向に展開してゆくためのとても良い方法だからだ。

ちなみに私は、リュックサックにいつもノートを一冊——「思想のノート」と呼んで——携行している。何か思いつくと、すぐさまそれに書き留めるためだ。すると、不思議なことが起こる。当初の思いつきはほんの文章一行ほどの内容でしかないのに、書いているうちに、その文が文を呼び、言葉が言葉を呼んで、気がついたら半ページ、場合によっては2〜3ページも何か書きつけてしまっている、というようなことがよく起こるのだ。どうして、そんなことが起こるのか。

ここには、言葉とわれわれの思考との関係にまつわる興味深い問題が横たわっている。われわれはよく「言葉を駆使して」というような言い方をする。そこでは、言葉は「道具」のようなものとして考えられており、それを使いこなす人間は「主体」とみなされているわけだ。確かに、われわれ人間が言葉を（自由自在に）操る、という側面があることは否定できない。他方でしかし、われわれの意識が言葉によって担われ、むしろ動かされている、という面もまたあるはずなのだ。

言葉は一種のネットワークを形作っている。システムとか構造と言いつけてもよい。例えば今、私が「進歩」について考えたとする。私は「進歩」という言葉を思い浮かべる。すると、その時、この言葉に関連する言葉たちもまた、引きずられるようにして私の意識の表面近くまで浮上してくる。

意味の似た言葉（例えば、進化とか発展とか）や意味が反対の言葉（退化や反動、保守）だけではない。響きの上で関連する言葉（○ンボや○ンボ）だって、ひよっこり浮かんでこないとは限らない。それらの言葉によってさらに別の言葉の群れが——普段は意識の底の方に眠っていたのに——目覚めさせられて、いかなればスタンバイすることになる。

そういう風にして、われわれの思考は進んでいく（あるいは、迷走する）。私は、知っているすべての単語をいつも意識的コントロールの下に置き、それを自在に使いこなしながら思考している、というような話ではないのだ。実際、われわれ一人一人が、一体何千万の単語を知っているのかもしれないが、それらのすべてを常時意識しながらものを考えているなんてまずありえない。私の頭はたちまちパンクしてしまうだろう。

こうして、私は、かつて構造主義が、言語と意識、構造と主体の関係について理論化した内容の正しさを、書くことを通して自ら確認することになる。私は言葉の主人ではない（奴隷でもないが）。この文章を書く作業にしても、言葉が私の頭を土俵にしてあっちこつちと転がり回るのを面白がりながら、それを追いかけるようにして記録してみた、というにすぎない。私の意識が言葉の網の上を踊ったのだ、と言っても同じことだろう。

「読みながら書く」あるいは「書きながら読む」というこの方法——これが習慣になれば、レポートの一本や二本、苦もなく——楽しく——書けるようになるのは請け合いです。是非、ためしてみてください。

